



Title	アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造
Author(s)	佐藤, 知己; Sato, Tomomi
Citation	北方人文研究, 1, 55-68
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34540
Type	departmental bulletin paper
File Information	SAT0.pdf



アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造¹⁾

佐藤 知己

北海道大学大学院文学研究科

1. はじめに

筆者は既に佐藤 (2005) においてアイヌ語千歳方言における名詞の語形成法の概略を述べている。しかし、そこでは主要なパターンの分類結果を提示したにとどまり、特に問題が多い、動詞が関与する合成名詞形成に関する理論的な諸側面については十分に詳しく述べることができなかった。本論文ではアイヌ語千歳方言における合成名詞の語形成法について、特に動詞が関わる場合を中心に、アイヌ語名詞の語形成法一般の問題を念頭に置きながら、あらためて述べることにする²⁾。

2. 先行研究について

アイヌ語の名詞の構造についての重要な指摘としては、なによりもまず知里 (1974) があげられる。知里は惜しくも早世したため、専門的な学術論文としてこの問題を論じることはなかったが、その主要な論点は一般向けのこの書物の中においても十分に述べられていると言えよう。知里の考えがよく現れている部分としては、たとえば以下のような個所を挙げることができるであろう。

日本語では「神が・遊ぶ・広場」「鹿が・出てくる・沢」「丸山の・ある・沢」などという言い方は、ごくありふれた言い方で、ちっともおかしくない。ところがアイヌ語ではそういう言い方はしない。そういう言い方をしても意味が通らないのである。ではどういう言い方をするか。「神が・そこで・遊ぶ・広場」「鹿が・そこへ・出てくる・沢」「丸山が・そこに・ある・沢」というような言い方をするのである。たとえば次のように。

kamuy o-sinot mintar 「神 (が)ーそこで・遊ぶー広場」

yuk o-san nay 「鹿 (が)ーそこへ・出てくるー沢」

tapkop e-an nay 「丸山 (が)ーそこに・あるー沢」

1) 本稿は平成 19 年度科学研究費 (基盤研究 (C))、「古文獻によるアイヌ語史の構築」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 17520245) による研究成果の一部である。

2) ここで言う「合成名詞」は自立性の高い語幹を直接構成要素とするタイプの名詞を指すものとする。

これらの o- や e- は、それらがなければ意味が通らないほど、上のアイヌ語の表現の中では重要な役割を演じているのである。

(知里 1974 : 379)

知里のこの説明は、sinot「遊ぶ」、san「出てくる」、an「ある」という自動詞は、このままでは名詞の構成要素としては不適格なのであり、それぞれ o-sinot「～で遊ぶ」、o-san「～へ出てくる」、e-an「～にある」のような他動詞化を行わなければならない、ということ述べたものとみることができる。さらに言えば、自動詞は主語一つだけしか取らない動詞であるから、sinot、san、an という自動詞のままではそれぞれ「神、広場」、「鹿、沢」、「丸山、沢」という二つの名詞と統合できない、ということを指摘したものとみることができる。アイヌ語の名詞の構造に関わる重要な原則を述べたものと言うことができるであろう。

このように、知里の説はそれまでのアイヌ語研究では問題にされることのなかったアイヌ語の名詞構造に関わる重要な指摘であったことは確かであるが、他方、一般向けの説明を意図していたため、この問題を徹底的に掘り下げて究明したものは言い難い面があることも否定できない。知里の後、その説の不備を指摘し、アイヌ語の名詞構造についてより一般性の高い制約を発見し、画期的な指摘を行ったのが切替 (1984) である。

知里は指摘していないが、切替はアイヌ語の名詞表現の中によく似てはいるが構造上区別しなければならぬ二種の構造があることを指摘する。

修飾句は、それがあることによって文が完成するような名詞的要素を一つ欠き、その欠けているものを被修飾語とする…(中略)…このように規定される一群の名詞句を以下、「修飾構造」をなしていると言うことにする。

切替 (1984 : 108)

知里の説明は切替がここで述べている「修飾構造」に当たるものについては適切なものであったが、実は知里が例として用いているものの中には単純な修飾関係では説明不可能な、知里自身が述べたアイヌ語の名詞構造に関する説明原理と矛盾するものが多く含まれていたわけである。この点に初めて気が付き、知里説の不十分さを指摘したのは切替の卓見であった。切替はこの点について次のように述べる。

名詞句には修飾構造をなしているものばかりでなく、一見修飾構造に似ているが、これと区別されるものもある。たとえば、次の名詞句：6.i-sapak kik ni (kik「～が～を打つ」)〈神謡 p. 82; p. 102〉。網ないしどうにかかった魚の頭を打つ棍棒のことで、原文には「魚をとる道具」〈神謡 p. 83; p. 103〉と訳されている。i-sapa「その頭」(魚の頭)は他動詞 kik の目的語である。前節でみたように、「目的語・他動詞・」という修飾語からは次に主語相当要素が立つことが期待される。しかし ni「木」は主語に相当するとは考えられない…(中略)…このように、修飾構造のみられない名詞句を以下、「擬似修飾構造」をなしていると言うことにする。

切替 (1984 : 108-9)

切替のこの指摘は、それまで気が付かれていなかったアイヌ語名詞の重要な型の存在を指摘した

ものとして極めて重要である³⁾。さらに、切替(1984:117-8)はアイヌ語において自動詞が名詞的に機能することを確認した上で、アイヌ語の名詞構造をより一般化して次のように述べる。

先にわれわれは擬似修飾構造なるものの存在を見いだした。それは、主語を欠く自動詞的形式と二次的構成的な名詞との結合ということであった。その場合の主語を欠く自動詞的形式も、それ自体が既に名詞的機能を果たしていると考えてよいのではないだろうか…(中略)…擬似修飾構造はそのうちのg.「名詞・名詞」型として分類される。

切替(1984:118)

すなわち、切替の結論によれば、アイヌ語の合成名詞には、一般的な規則によって形成されるものとしては、知里によって発見された「修飾構造」の条件を満たすものと、名詞+名詞型(自動詞+名詞を含む)に属するものの二種が存在する、ということになる。

以上、簡単に見てきたように、知里、切替の両説はアイヌ語名詞の構造に関する要点を尽くしており、その結果の主要部分については現時点においても有効であり、アイヌ語の名詞の構造を考える上で依然、有益な視点を提供するものである。特に、切替(1984)は自動詞の名詞化による「擬似修飾構造」という概念を提出することによって知里が一般化できなかった現象を見事に解決している点で、アイヌ語研究史上不滅の業績の一つと言っても過言ではないと言える。しかし、現時点で言えば、これらの優れた先学の分析にも細かな点については不十分な点がないわけではない。特に、次のような諸点についてはなお考察の余地があると思われる。

- 1) 資料的問題
- 2) 「擬似修飾構造」の存在理由
- 3) 「語」と「句」の区別の問題
- 4) 「抱合」と名詞語形成の関連性

以下では、これらの点に順次触れつつ、アイヌ語の名詞語形成の問題について述べることにする。

3. アイヌ語千歳方言の名詞語形成の概観

知里(1974)、切替(1984)がアイヌ語の名詞構造に関する画期的な業績であることは既に述べた通りであるが、他方、2節の末尾で述べたように、いくつかの実際的、理論的な問題点を含んでいることも否定できない。

まず、第一に、資料的問題があげられる。知里(1974)で用いられたアイヌ語名詞の資料は、実はアイヌ語地名が大きな比重を占めている。また、知里の研究を批判的に発展させた切替の研究においても、必然的にアイヌ語地名資料を例証としている場合が少なくない。しかし、佐藤(2005)が指摘したように、アイヌ語地名の多くは音形も意味もアイヌ語話者から直接記録されたものかど

3) 厳密には、切替(1984)は、ここでの引用からもうかがえるようにアイヌ語の「名詞」ではなく、「名詞句」の構造を議論の出発点としている。この点は理論的に大きな問題を含むものであるので5節および6節で詳しく述べる。

うか必ずしも明らかでないものが多く、共時的な言語資料として用いるには様々な資料的問題を含んでおり、アイヌ語名詞の一般的構造を論じる資料としては必ずしも適切でない面があると言える。一方の、それも量的に限られた資料に基づいて一般的な結論を出すことの危険は承知しつつも、種々雑多な資料を無批判に用いて言語分析を行うことの危険を考慮して、以下では主として筆者が採集した千歳方言の資料に基づいてアイヌ語の名詞構造の問題を再考してみることにした⁴⁾。

佐藤 (2005) に基づき、アイヌ語千歳方言における名詞の主要な語形成をまとめると以下のようになる。

[1.1.] 直接構成素に語を含むもの⁵⁾

[1.1.1.] 両要素ともに語の場合

[1.1.1.1.] 名詞+名詞

ni-tay 「木・群生 (=林)」

ape-sam 「火・側 (=炉の側)」

susu-ni 「ヤナギ・木 (=ヤナギの木)」

[1.1.1.2.] 動詞+名詞

kim-un-kamuy 「山・にいる・神 (=クマ)」

ci-kuy-pas 「人が・噛む・灰 (=噛まれた灰)」

pe-ta-ru 「水: 汲む・道 (=川に突きだして作られた水汲み用の棧橋)」

[1.1.1.3.] 名詞+動詞 (例は少ない)

sapa-kay 「～の頭・折れる (=頭を取った干しサケ)」

oysiru < o-i-siru 「～の尾・ものを・こする (=産卵後の消耗したサケ)」⁶⁾

[1.1.2.] 片方の要素のみが語の場合

[1.1.2.1.] 接頭辞による派生

[1.1.2.1.1.] 名詞に接頭辞が付いたもの

ar-kamyasi 「本当の・化け物」

si-niskanto 「本当の空 (=青空)」

mo-sir 「小さな・土地 (=島)」

[1.1.2.1.2.] 動詞に接頭辞が付いたもの

(このタイプはアイヌ語にはないと考える⁷⁾。)

[1.1.2.2.] 接尾辞による派生

[1.1.2.2.1.] 名詞に接尾辞が付いたもの

4) 具体的には筆者が千歳方言話者白沢ナベ氏からご教示いただいた資料に基づく。ご教示に深く感謝申し上げます。なお、同じ話者の資料に基づく中川 (1995) も参照したがその場合はその旨を明記する。

5) ここで言う「語」は単独で用いられることが稀だが自立性が比較的高いとみなせる語幹も含めて考えることにする。

6) 厳密には o-「～の尾」は接辞とみなすべきもので、独立性の高い語幹とはみなせないものであるが、機能的にはあたかも独立の名詞語幹と同様な文法的役割を果たすので、ここでは例としてあげてある。

7) i-ku 「ものを・飲む=飲酒、宴会」のような名詞的形式はあるが、これは接頭辞 i-「もの」によって名詞化が行われたのではなく、「ものを飲む」という動詞がさらに転成 (conversion) によって名詞化したものと考えて、接頭辞による動詞の名詞化には含めないことにする。

cep-po 「魚・小さい (=小魚)」

[1.1.2.2.2.] 動詞に接尾辞 (的要素) が付いたもの

asin-pe 「出る・もの (=賠償物)」

ami-p 「人が着る・もの (=着物)」

(この型は「動詞+名詞型」と同様に考えることが可能である。)

[1.2.] 語を含まないもの (理論的には可能だが、適当な例無し⁸⁾。)

佐藤 (ibid.) でも述べたが、名詞の語形成に関する最も重要な問題は、[1.1.1.2.] の動詞+名詞型に関するものである。その理由は、この型の合成名詞は構成要素の中に動詞を含んでおり、そのため、名詞の語形成の問題であるにもかかわらず、構成要素として含まれている動詞の内部構造も問題としなければならないために、結果として非常に複雑な構造を分析対象としなければならないからである。以下では、この「動詞+名詞」型に限定してアイヌ語千歳方言の合成名詞の構造についてあらためて論ずることとする。

4. 「動詞+名詞」型の合成名詞の構造

前節で述べたように、アイヌ語の合成名詞のうち、最も複雑な構造を示すのは「動詞+名詞」型に属するものである。主要な先行研究である知里 (1974)、切替 (1984) のいずれもがこの型の名詞をめぐる議論を展開していることは当然と言えよう。

「動詞+名詞」型の合成名詞は、形の上からは動詞が名詞を意味的に限定する、という構造を取っている。従って、先行研究のまとめにおいて述べたように、この型の合成名詞はアイヌ語の研究においては早い時期から関係節化と関連付けて説明されることが多かったと言える。語形成の問題を扱う前に、アイヌ語の関係節の一般的な構造を千歳方言を例として、簡単に見ておくことにする。

hemanta	aynu	utar	kar?	→	hemanta	ϕ	kar	aynu	utar
何	人	達	作る		何		作る	人	達
								↑	

「人々は何を作る (作った) か。」→「何を作る (作った) 人々」

上の例では kar「作る」は主語と目的語の二つの名詞項を必要とする動詞であるので、主語の aynu utar「人々」が関係節化されても、結局のところ、結果として生じた名詞句である hemanta kar aynu utar「何を作る人々」も、hemanta「何」、aynu utar「人々」の二つの名詞句を含んでいる。関係節化された後も、kar「作る」が必要とする元の文の主語と目的語にあたるものが保持されている、という点に注意されたい (なお、この図は便宜的なもので、アイヌ語の関係節形成が名詞の移動によるプロセスによるものかどうかはまた別の問題である)。

関係節化を受ける名詞句は次のように目的語である場合もある。

8) つまり、自立性のない語根+接尾辞→名詞 (例: 日本語 am-i「網」)、または接頭辞+自立性のない語根→名詞 (例: 英語 con-cept「概念」) のようなパターンを示すものであるが、適切な例を見つけることができない。なお検討を要する。

cikuni k-etoyta → ϕ k-etoyta cikuni
 木 私-植える 私-植える 木

「私が木を植える」→「私が植えた木」

上の例では、etoyta「～を植える」は主語と目的語の二つの名詞句を必要とする動詞であるが、主語でなく、目的語の cikuni「木」が関係節化されている。なお、この例では「主語」は一人称単数であるから、独立の名詞句ではなく、自立性が低い人称接辞で表現されているが、人称接辞が動詞の主語の位置をいわば自立的な名詞と同様に埋めているわけで、広い意味で、やはり主語、目的語の二項を満たしていると考えられる。

修飾される名詞句は、元の文では以下のように、所有者に当たる場合もある。

hekaci ona-ha ka isam → ϕ ona-ha ka isam hekaci
 男の子 父-所属接尾辞 も いない 父-所属接尾辞 も いない 男の子

「男の子の父親もいない」→「父親もいない男の子」

この例は名詞句 hekaci onaha「男の子の父」から所有者の「男の子」が関係節化されている。なお、この例は、動詞の項数のみならず、いわば名詞のとり得る項数 (ona-ha「～の父」が所有者を要求する) も関係節化に関連していることを示すものである。isam「～がいない」は自動詞で、主語名詞句を一個だけとる一項動詞である。従って、動詞だけをみれば hekaci「男の子」、ona-ha「父親」の二つの名詞句を取れないようにみえる。しかし、ona-haが「～の父」という、所有者を必要とする名詞であるために項数の不足が解消されているわけである。

関係節化による名詞句の形成の場合と同様、名詞の語形成においても動詞の取り得る項数の制約は守られるのが原則である。[1.1.1.2.] にあげた例でいうと、un「～が～にある」(二項動詞) に対して kim「山」、kamuy「神」の二項、kuy「～が～を噛む」に対して ci-「人が」と pas「灰」の二項、ta「汲む」に対して pe「水」と ru「道」の二項のように、これらの例においては動詞の必要とする項数と名詞的形式の項数とが一致している⁹⁾。

関係節と合成名詞は共通点もあるが、重要な相違もある。既に述べたように、切替 (1984:112) は合成名詞には関係節における修飾構造とは異なる「擬似修飾構造」と呼ばれる構造が見られることを指摘している。既にあげた例で言えば、pe-ta-ru「水・汲む・道」の pe「水」(目的語)+ta「汲む」(他動詞) は「擬似修飾構造」である。なぜなら、意味的に ru「道」は pe-ta「水を汲む」の主語にはなり得ないので、通常修飾関係をなしていないからである。切替はさらにアイヌ語において一項動詞が名詞としても機能することに着目し、pe-ta「水を汲む」のような擬似修飾構造に現れ

9) ただし、「項数の一致」は合成名詞(語)、関係節(句)のいずれにおいても成立の必要条件ではあるが十分条件ではないという点にも注意が必要である。たとえば、wakka-ku-ontaro「水・飲む・樽」という表現は可能であるのに対し、*wakka ka ku ontaro「水・も・飲む・樽」のような表現は「項数の一致」の条件は満たしているにもかかわらず通常はみられない。このことは、項数の一致に加えて動詞の人称変化(屈折)も関与していることを示すものである。

る一項動詞を名詞的形式とみている。この切替の分析の理論的な含意は次のようなものであろう。すなわち、動詞を名詞に転換することによって、動詞的な形式がその項（この場合は主語）とは言えない名詞を修飾する、という意味的、文法的矛盾をアイヌ語は解消していることになる。

さて、以上から、合成名詞の形成に擬似修飾構造（名詞に転用された自動詞）が大きな役割を果たしていることはわかったが、さらに進んで、アイヌ語の合成名詞の形成において、なぜ擬似修飾構造がわざわざ必要なのか、という根本的な点についても考えておく必要があるであろう。切替が述べている、意味的には主語ではない名詞を自動詞が修飾するという事態を避けるために擬似修飾構造が用いられる、という説明はこの現象の本質的な説明ではないと言える。なぜなら、問題の本質は、そもそも、意味的な主語にあたる要素と意味的な述語に当たる要素が一見して不一致であるような (pe-ta-ru「水・汲む・道」の例を参照)、意味解釈上の困難を引き起こす可能性のある、ある意味で不都合な構造である擬似修飾構造をわざわざ用いて名詞を修飾しなければならない理由とは一体何か、ということだからである。次節ではこの問題を主として論ずることとする。

5. アイヌ語における「擬似修飾構造」の存在理由

Bloomfield (1933 : 230) の古典的な記述以来、近年の Di Sciullo and Williams (1987 : 49) に至るまで、原則として語はその内部構成素に関して統語的な要素（屈折要素）を含まず、また、統語的な操作（内部構成素と外部の語との統合、内部構成素と外部の語との照応）を受けることができないうことが言われている（このことを Di Sciullo and Williams は “syntactic atomicity” という用語で表現している）。すなわち、もし、ある構造の内部構成素が統語的な要素を含んでいたりと、内部構成素に統語的な操作を加えることが可能だとすれば、その構造全体は語ではなく、「句」であるのが一般的であるということになる。

知里 (1974)、切替 (1984) の重要な理論的不備は、なによりもまず、この “syntactic atomicity” というものを十分考慮せずにアイヌ語の名詞語形成を論じている点に由来するようと思われる。たとえば、切替 (1984 : 113) は、「ところで、名詞句の中には、特に慣用的に用いられる固定的な形式、いわゆる「合成名詞」とみなすことができるものがある。今までに挙げてきた日常用具などの名称は合成名詞と言ってよかろう。擬似修飾構造はそのような名詞句に認められる」と述べており、アイヌ語の合成名詞の中には句に由来するものがある、ということをおそらく当然のこととして述べている¹⁰⁾。しかしながら、上で述べたように、「句と同様な構造を有する語」というのはそもそも語の一般的な定義と明らかに矛盾するものであり、通常の型から逸脱するものである。その点についての認識が不十分なままでは言語学的な分析としては片手落ちであろう。以下ではこのような「句」

10) 切替は明確には述べていないが、当然、修飾構造をもつ合成名詞も句に由来すると考えているものと思われる。この点で、切替の立場は本稿における筆者の立場と結果的に大きく違っているわけではないが、そこに至るプロセス、動機付けの有無に違いがある、ということをおきたい。また、切替の仮定には細かい点では問題もある。切替は擬似修飾構造も修飾構造と同様に名詞を修飾して句をなす、と考えているようであるが、そのような仮定を支持するに足りる証拠をアイヌ語において見出すことは、実はそれほど容易なことではない。すなわち、切替が「句」としている i-sapakik ni のような例において、もし切替の仮定が正しいものとすれば、i-sapakik「魚の頭をたたくこと」という「語」（名詞）だけをなんらかの語が外部から修飾する、という理論的な可能性はあるはずであるが、実際の例を収集することが困難なのは勿論、適切な例を理論的に仮想してみることも困難なのであり、この点においても切

や「語」の一般言語学的な特徴を踏まえた上で、アイヌ語の合成名詞について考察してみることにしたい。

語形成において構成素が屈折要素を含まない、という点は既に述べた。しかしながら、動詞を構成要素に含むアイヌ語の合成名詞の構造において、まず問題になるのが動詞の人称(屈折)である。アイヌ語の動詞は原則必ず人称変化という文法的な語形変化を行わなければならない。人称変化させずに動詞を用いることは、アイヌ語においては初歩的な文法的誤りと考えられている。動詞を構成要素に含むアイヌ語の合成名詞は、この点で大きな困難に直面する。つまり動詞を構成素に用いようとするれば、必然的に動詞は人称変化を行わなければならないが、人称変化は屈折に属するもので、動詞の人称形をそのまま用いることは、語の syntactic atomicity という上記の一般原則に反する事態を招いてしまう。従って、動詞を動詞のまま合成名詞の構成要素として用いることができないので、人称変化が不要な「擬似修飾構造」(名詞化された自動詞)が用いられるのだと考えられる。

上で述べたことを実例で説明すれば次のようになる。pe-ta-ru「水・汲む・道」¹¹⁾という合成名詞は表面上は「目的語+他動詞+名詞」という構造である。もっとも、そのままだと他動詞 ta は人称変化を行わなければならない筈である。しかし、アイヌ語では、pe-ta「水を汲む」全体が自動詞となり、自動詞はそのまま名詞に転成できるので、名詞化により人称変化の義務を免れることができるわけである。これにより結果的に“syntactic atomicity”の制約もクリアすることができると考えられる¹²⁾。なお、動詞人称形を用いて同様な内容を表現しようとするれば、おそらく wakka a-ta kusu oro peka apkas-an ru「水を・人が・汲む・ために・そこを・通って・人が・歩く・道」のような冗長な表現になるであろう。すなわち、「擬似修飾構造」は人称形を回避することにより、より簡潔な構造で同様な内容を表わす語を形成する重要な手段である、ということができる。

ところで、ここで重要な理論的問題が生ずることに注意しなければならない。切替説に従うならば、ru「道」が ta「汲む」の主語としては不適當であるから pe-ta という「擬似修飾構造」が用いられる、ということになるわけであるが、それならば「修飾構造」の場合はどうなるのであろうか。

切替(1984: 113)は amam e cikap「すずめ」のような例を「修飾構造」を有する語の例として挙げている。切替によれば、この語は主語に当たる名詞(cikap「鳥」)を主要部として持つ修飾構造を有するから合成名詞として適格な構造を持つ、ということになるのであろうが、これまでに述べてきた“syntactic atomicity”の観点から言うと、重大な問題があることがわかる。もしも cikap「鳥」が e「食べる」の主語であるとする、e「食べる」は人称変化を含む動詞¹³⁾という解釈が与えられてしまう可能性がある。そうなると amam e cikap は「スズメ」という語ではなく「穀物を食べる鳥」という意味の「名詞句」であると解釈される可能性が出てくる。これに対し、切替が挙げている擬似修飾構造を含む i-sapa-kik-ni「ものの・頭を・たたく・棒(=サケの頭をたたく棒)」

替の説にはなお一考を要する点が残されていると言えよう。この問題はそう単純なものではないが、切替のように修飾構造と擬似修飾構造を同一レベルで論ずるやり方は、擬似修飾構造のほうが合成名詞により多くみられる傾向がある、という分布上の偏りを説明するのに必ずしも適切とは言えない、という点もここで指摘しておきたい。

- 11) 意味は特殊化して「棧橋」のような意味になっているが、ここではその点は考慮しないことにする。
- 12) 厳密には pe-ta-ru の pe「水」は単独では用いることができない自立性の低い名詞的要素である、ということも pe-ta が「水をくむ」という一つの動詞をなす、と解釈される理由になっている。
- 13) アイヌ語では三人称は見かけ上は無表示であるが、標識の欠如が三人称を積極的に表示している、ゼロ形式が付加されていると考えられ、やはり屈折形式が用いられていると解釈できる。

のほうは、名詞化された動詞 i-sapakik 「ものの頭をたたくこと」が主語とは考えられない ni 「木、棒」を修飾し、結果的に関係節（句）の解釈の可能性を排除しているために、一語としての統合性（ひとまとまり性）から言えばはるかに適切性が高い形式であると言わなければならないことになる。繰り返すが、ここで重要なのは、切替が「擬似修飾構造」と呼び、あたかも正規の語形成規則から逸脱しているかのように表現している構造こそが一般的な語形成の制約であるところの syntactic atomicity に従うものなのであって、むしろ言語学的に説明されるべきは「修飾構造」を有する合成名詞の方なのだ、と言うことなのである。このことは知里（1974）の記述では、もっと明白に問題となる。知里があげている kamuy o-sinot mintar 「神（が）－そこで・遊ぶ－広場」、yuk o-san nay 「鹿（が）－そこへ・出てくる－沢」、tapkop e-an nay 「丸山（が）－そこに・ある－沢」という例は、いずれも動詞が主語に相当する名詞を伴っており、関係節化を受けた「名詞句」とどこが違うのか、という疑問が当然起こってくるであろう。この点に関してはアイヌ語における「抱合」の問題と、「語と句の区別」の問題が関わっている。次に、これらの問題について述べることにする。

6. アイヌ語の「抱合」の制約と合成名詞

切替（1984）がアイヌ語の「動詞＋名詞」型の合成名詞について、名詞の前に立つ動詞要素は実は自動詞が名詞に転成されたものだ、と述べていることは既に紹介した。しかし、どのような条件を満たせば自動詞になるのか、という点に関しては、他動詞を自動詞化するプロセスの一つである「名詞抱合 (noun incorporation)」(名詞を動詞に合体してより大きな動詞を作るプロセス)に関わる制約が実は重要な問題となるはずである。しかしながら、この点については切替は全く触れるところがない。このことは、以下の切替の記述からも明らかである。

他動詞に基づく修飾構造をなすもので、合成名詞とみられる例は、後述する特別の類を除けば比較的僅かである。管見では「主語・他動詞・目的語相当要素」のものは次の一例のみである。：16. eper se sito 「熊（が）・背負う・もち」（熊祭りのとき、熊に土産として持たせるもち。se「～が～を背負う」）。用例の僅少さは、この型の修飾構造が一つの合成語としてまとまるだけの力に不足していることを示唆しているのかもしれない。ただし、同じ型で、いわゆる主格接頭辞 ci- を主語の代りに立てた例は多い：17. ci-ma cep 「人が・火にあぶる・魚」（火に当てて干した魚。ma 「～が～を火にあぶる」）；ci-sura-p 「人が・放す・もの」（三歳以上の、母熊から離れた熊。sura 「～が～を放す」）。

切替（1984：113）

切替は、eper se sito 「クマが・背負う・団子」のような「主語＋他動詞＋名詞」型の合成名詞が少ないことに気が付いてはいるが、その理由については明白には述べていない。しかし、eper-se 「クマが背負う」という形式が自動詞として存在可能かどうか、という問題を考えてみると、この問題の解決の道は自ずと開けてくるように思われる。

佐藤（1992：199）は、アイヌ語の「抱合」に関して、他動詞主語の抱合が稀であることを報告している。eper se 「クマが背負う」という形式はまさしく他動詞主語の抱合を生じさせるものであるがゆえに、切替の言う「自動詞化」の可能性が皆無に近いもののはずである。この予測は、「自動詞のみが名詞に合成されて合成名詞が生ずる」とする切替の説とは全く相いれないものである。eper-

se-sito「クマが・背負う・団子」のような型の合成名詞の例が極めて少ないのは、このような形式が語として提示された場合、抱合の制約の面から自動詞化が明らかに困難であるので一語と解釈されにくく、関係節化による名詞句と解釈されやすいためであると思われる。これに対し、amam-e-cikappo「穀物・食べる・鳥(=スズメ)」のような例がより多く見られるのは、amam e「穀物を食べる」という形式が、通常の句の解釈の他に、目的語抱合によって形成された自動詞的形式と解釈される余地があるために、関係節化との区分が不分明な点はあるけれども語と認定される許容度が相対的に高いからであろう。すなわち、まず、amam-e「穀物を食べる」で一語の自動詞が形成され、これがそのまま名詞に転成されて、「穀物を食べる」という名詞的形式が作られ、次にこの形式がさらに cikap「鳥」という名詞的形式と結合されている、と考えると、「名詞+名詞」型の合成名詞、ということになり、“syntactic atomicity”に抵触しない解釈が許容される。

さて、これまで切替の言う「修飾構造」を含む名詞が語としてのまとまり、という点でむしろ問題のあるものであることを指摘してきたが、ここで問題になるのは、それにもかかわらず、amam-e-cikappo「スズメ」、eper-se sito「クマが背負う団子」のような、句(関係節化)とも解釈され得るような、語としての資格に問題のあり得る形式がアイヌ語に存在する理由は何か、という点である。

ここで考慮する必要のある概念として重要なのは、Bloomfield (1933: 207) が指摘している「句単語 (phrase-word)」の考え方である。Bloomfield は、語形成全体からすれば明らかに例外的なものではあるが、語の中にも句の構造を有するものがあることを指摘している。たとえば英語の jack-in-the pulpit「説教壇のジャック」(=「マムシグサ(植物名)」)のようなものである。アイヌ語の、関係節と区別がつきにくい「名詞+他動詞+名詞」型の合成名詞のあるもの(あえてすべてとは言わないが)は、このような「句単語」と解釈できるものなのではないだろうか。すなわち、アイヌ語にももともとは句に由来するとみられる例外的な合成名詞もあると考えるのである¹⁴⁾。例えば、アイヌ語千歳方言の合成名詞の類別において、[1.1.2.2.2.]で例としてあげた amip「着物」という語は、a-mi「人が着る」、-p「もの」と分析されるが、a-mi「人が着る」は不定人称接辞 a-「人が」を取った一種の「人称形」である。人称形は屈折要素を含んでいるので、統語的な形式であると言える。したがって、アイヌ語の amip「着物」は実は構造上から言えば本来は語ではなく、「句」とみなすべき性質を持っていることになる。しかし、本来は「人が着るもの」という句であったものが、「着物」というひとまとまりの概念を表す単独の「語」として慣用的に定着してしまったものと考えられる(なお、ci-kuy-pas「人が・噛んだ・炭」という語における ci-は主格的な意味ではあるが、生産性が低く、派生接辞とみなすべきものであって、人称接辞ではないので通時的にはともかく、共時的には句とは考えないことにする)。もっとも、この種の形式は本来は「句」であって語ではないので、このような統語的な要素である人称接辞を含む「語」はアイヌ語でもそれほど一般的とは言えないことに注意する必要がある。日本語にも「人でなし」(義理人情をわきまえない人間)、「木の芽」(山椒の芽)のように本来は句であったものが語として定着したと思われる形式がみられるが、語形成としてはやはり特殊な部類に属するであろう。amam-e-cikappo「スズメ」、eper-se-sito「クマが背負う団子」のようなアイヌ語の形式も、本来は句であったものが、言語外的な事情で個別に語彙化したもの、と考える方が体系的な観点からはより妥当であると思われる。

参考までに中川(1995)所載の動詞的形式を含む合成名詞を分析したところ、次のような結果と

14) この点は注10を参照。

なった¹⁵⁾。

- A. 「自動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められるもの：apkas- kamuy 「天然痘の神」<apkas 「歩く」、kamuy 「神」。その他を含め合計 33 例。
- B. 「自動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められないもの：rukari-usi 「便所」<rukari 「大小用を足す」、usi 「ところ」。rek-kuttar 「ヨブスマソウ」<rek 「鳴く」、kuttar 「イタドリ」。ahun-poru 「あの世への入り口」<ahun 「入る」、poru 「洞窟」。以上 3 例。
- C. 「不定人称接辞 a-+他動詞+目的語」型：a-e-sorma 「コゴミ」<a- 「われわれが」、e 「食べる」、sorma 「ゼンマイ」。その他を含め合計 8 例。
- D. 「主格的不定派生接辞¹⁶⁾ ci-+他動詞+目的語」型：ci-koyki-p 「魚獣」<ci- 「われわれが」、koyki 「獲る」、-p 「もの」。その他を含め合計 11 例。
- E. 「目的語+他動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められるもの：amam-e-cikap 「スズメ」<amam 「穀物」、e 「食べる」、cikap 「鳥」。その他を含め合計 10 例。なお、itanki-kem-askepet 「人差指」(<itanki 「椀」、kem 「なめる」、askepet 「指」)を除き、神名、動植物名、役職名の例しかない。
- F. 「目的語+他動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められないもの：cipor-nina-p、「筋子つぶし具」<cipor 「筋子」、nina 「こねつぶす」、-p 「もの」。その他を含め合計 8 例。
- G. 「目的格的不定派生接辞¹⁷⁾ i-+他動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められるもの(適切な例なし)
- H. 「目的格的不定派生接辞 i-+他動詞+名詞」型で主語・述語関係が認められないもの：i-tata-ni 「まないた」<i- 「もの」、tata 「刻む」、ni 「木」。その他を含め合計 6 例。
- I. 「主語+他動詞+目的語」型：atuy-esatsat-i 「海の浅瀬」<atuy 「海」、e- 「〜で」、satsat 「乾く」、-i 「ところ」。この例 1 例のみ。

15) 予断や偏見を防ぐため、ここでの分類、集計にはあえて自己の採集データを用いず、中川(1995)を用いた(もともと、これまでのところ、自己の採集データにおいてもここでの結論と矛盾するような結果は出ていないが)。中川(1995)によれば、その全収録語数は約 3700 である。引用にあたってはハイフンを挿入したり、便宜的に説明を一部変更、追加した点がある。なお、ここで示した型の他に、仮に「主語+場所目的語要求他動詞+名詞」型(ay-us-ni 「棘が・生える・木(=タラノキ)」、10 例)、場所目的語+場所目的語要求他動詞+名詞」型(Iskar-un-kur 「イシカリに・いる・人」、25 例)と呼ぶことのできるものが相当数ある。ここで「場所目的語要求他動詞」と呼んでいるものは、多くの場合、un 「〜にいる」のように場所目的語を取る他動詞を意味する。他動詞ではあるけれども、多くの場合、存在的な意味を表わし、典型的な他動詞とは言えないのでここでは除外している。なお、場所目的語要求他動詞の多くは自立性が高いとは言えず、通常は単独で述語となることがない。このような要素を含む構造はそれだけで「句」ではなく合成名詞であるという性格がより明白だ、ということなのではないだろうか。「主語」に当たるものを含んでも「語」に認定される例数が比較的多いのはこのためであろう。ちなみに、佐藤(2005)はこれらの動詞が「所有」を意味する動詞としても働くのではないか、という仮説を述べている。この仮説が正しいとすれば「主語」を含む例も実は「目的語」の例であると再解釈される(例えば、ay-us-ni は「棘を・所有する・木」となる)。つまり、語中に主語要素を含むという極端に例外的な事例ではなくるので例数が比較的多いことも説明できることになる。

16) ci- は不定的な主語の概念を表わす派生的な接頭辞であるが、仮にこう呼ぶ。

17) i- は不定的な目的語の概念を表わす派生的な接頭辞であるが、仮にこう呼ぶ。

この結果をどう見るかは、視点をどこに置くかによってももちろん異なってくるであろう。また、元となる資料におけるある形式を語彙項目と認めるかどうかの判断がどのようなものであるのかによっても結果の見方が変わってくるかもしれない。それを承知の上で述べると、まず、Aのタイプは理論的には関係節ともみなせるけれども、構成素が明らかな自動詞であって、名詞+名詞型への再解釈が他のタイプに比べると容易であると考えられるので、ひとまず除外して考える。そうすると、句とまぎれやすい構造を持つ、語としての「ひとまとまり性」が低いものは、Eの「目的語+他動詞+名詞」型、Iの「主語+他動詞+目的語」型の合わせて11例しかない、ということになり、名詞のみの全体の語数は集計していないが、このタイプの「語」が全体からみてそう多くない、ということと言えるのではないかと思う（もっとも、“syntactic atomicity”を満たしていると考えられるB、D、F、Hの合計も28例であって、必ずしも多いとは言えないのは問題であるが）。また、Iの「主語+他動詞+目的語」型が一例しか認められないのは切替（1984）の指摘を実証するものと言える。このことは、少ないながらもE型が存在することと対照をなし、「抱合による自動詞形成の可否」がアイヌ語の合成名詞語形成に関与している、という本稿の予測と矛盾しないものと言える。

7. おわりに

以上、仮説的な部分も含めて、アイヌ語の合成名詞を再考してみた。主な結論をまとめると以下のようなになる。

- 1) 従来言われていた「修飾構造」を有する合成名詞と「擬似修飾構造」を有する合成名詞という区別は理論的には問題がある。修飾構造は屈折形式である動詞人称形の出現を前提とするので、このままでは「語は統語的な構成素を排除する」という語形成の“syntactic atomicity”に抵触する恐れがある。
- 2) アイヌ語には「修飾構造」を有する合成名詞も実際にはあると考えられるがそれらのあるものは句を語として用いるようになったために生じた「句単語」と考えられる。
- 3) 「句単語」は句の中のあるものがなんらかの理由で語として用いられるようになった散発的なものと考えられる。そのことは実際の言語データの分析からもうかがえる。千歳方言のデータを実際に分析してみると、最も句と紛れやすい「修飾構造」を有する「目的語名詞+他動詞+主語名詞」型の合成名詞の例は神名、動植物名、役職名にほぼ限られており、数も少ない。
- 4) 「句単語」との判別は実際上困難であるが、「目的語名詞+他動詞+主語名詞」型の合成名詞の中には「目的語名詞+他動詞」を「抱合」として扱って、一つの自動詞としたものもあると考えられる。自動詞は名詞に転成可能なので、全体が「名詞+名詞」型と解釈可能なため、この型の形式はアイヌ語の語形成規則により適合した形式であると考えられる。このことは、理論的には可能と思われる「主語名詞+他動詞+目的語名詞」型の合成名詞の例が実際のデータでは皆無といってもよいような状況であることと符合する。アイヌ語の抱合では「主語名詞+他動詞」というパターンは極めて稀であることから、「主語名詞+他動詞」は通常は「句」と解釈される可能性が高いと考えられる。そのため、「語」として用いるにはより有標性が高い形式として忌避されるのだと考えられる。
- 5) 識別の困難さの問題は別として、結局のところ、アイヌ語の動詞的形式を含む合成名詞は、「句

単語」型合成名詞と「自動詞転成名詞＋名詞」型合成名詞の二種に大きく分かれる。「自動詞転成名詞＋名詞」型合成名詞の中には修飾構造（主語－述語関係）が成立しないものと、見かけ上、修飾構造が成立するものがあるが、いずれも名詞的な形式が複合したものであることには変わりがなく、修飾構造が成り立つように見える場合でもそれはあくまでも見かけ上のものに過ぎない。

本稿における以上の指摘は、理論的なものが主であり、実証的な面で弱点があることは自覚している。また、アイヌ語において「語」とは何か、という根本的な問題も十分に論ずることができなかった。今後、不備を補い、さらに多くの言語データの分析を通して仮説を検証したいと考えている。

参考文献

Bloomfield, L.

1933 *Language* (George Allen and Unwin, London)

知里真志保

1974 『知里真志保著作集』 4

Comrie, B and Sandra A. Thompson

1985 “Lexical Nominalization”, in Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description* 3 (CUP): 349-98

Di Sciullo, Anna Maria and Edwin Williams

1987 *On the Definition of Word* (MIT Press, Cambridge)

切替英雄

1984 「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』 86：105-21

中川 裕

1995 『アイヌ語千歳方言辞典』（草風館）

佐藤知己

1992 「「抱合」からみた北方の諸言語」宮岡伯人編『北の言語』（三省堂）：191-201

2005 「アイヌ語地名研究と言語学」『アイヌ語地名研究』 8：153-80

Compound Noun Word Formation in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi SATO

Graduate School of Letters, Hokkaido University

It is known that Ainu has two types of compound noun constructions: the “modifying construction” and the “pseudo-modifying construction”. However, the term “modifying construction” from the outset contradicts the so-called “syntactic atomicity” of words, one of the most basic principles of word formation in general linguistic terms. Here, I suggest that among the compound nouns with the modifying construction, some are compound nouns exceptional in their construction, formed, as it were, directly from phrases (i. e. “phrase-word” by Bloomfield), while others are words containing a kind of verbal noun converted from the corresponding intransitive verb, formed, in turn, through “object-incorporation”. This assumption is supported by the fact that the number of compound nouns with the modifying construction is not so large in the lexicon as a whole (so, exceptional and marginal) and also supported by the fact that examples of the compound nouns with the modifying constituent “subject+transitive verb” are extremely few: the pattern “subject+transitive verb” is usually not possible as an intransitive verb with noun incorporation in Ainu, and therefore cannot be used as a verbal noun of the first member of a compound noun.